

2021年6月30日(木)

# 魚すり身、10年半ぶり高値

## 北米産 供給減や物流費高で

ちくわやかまぼこなどの原料となるスケソウダラすり身が10年半ぶりの高値となった。新型コロナウイルス禍による供給減や物流費の高騰が響き、指標となる北米産は前年同期比9%高い。巣ごもり消費を背景に練り製品の需要は堅調だが、かまぼこメーカーは原料調達が難しくなっている。商品価格への転嫁も現時点では厳しく、対応に苦慮している。

### 巣ごもり消費堅調

日本国内で使うスケソウダラのすり身は多くを北米から輸入している。スケソウダラ漁はA、Bの2シーズンあり、日本

の商社は年2回、現地の生産者と価格交渉する。上級品(洋上FA級、冷凍需要家渡し)の輸入価格は21年春シーズンに1

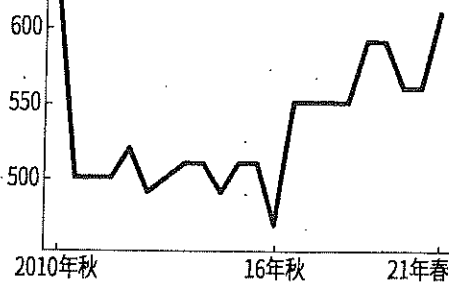
倍、610円前後となった。米国が主産地の漁獲を一時縮小した影響が残る10年秋シーズン以来の高値となる。

価格高騰の背景は、スケソウダラの漁獲状況が悪いことだ。漁獲高は64

万トと前年同期の3%減だが、魚体が小さいものが多かった。20年秋以降、「200〜300g前後の魚が増えている」(水産大手)。すり身加工に適したサイズの半分以下だという。

1匹からとれるすり身の量は減り、加工効率も悪化する。6月10日から始まった新シーズンでも漁獲は小型が中心で、供給は当面厳しい。

円/キロ すり身は10年半ぶり高値 (半期、2010年秋~21年春)



(注)北米産、FA級、需要家渡し



スケソウダラは北米を中心に水揚げされる

貿易統計によると21年1〜4月に北米産の輸入量は1・8万トと前年同期比10%減った。一方金額ベースでは、同68億円

国際的な輸送コスト高と円安・ドル高が追い打ちをかけた。水産大手によると、冷凍すり身を輸入する際にかかる輸送費は昨年同期比50〜70%高い。

で6%減にとどまる。需要はコロナ禍による内食ニーズの高まりで堅調だ。総務省の家計調査によると、20年の魚肉練り製品の支出額(2人以上世帯)は8602円と19年比3%増えた。

健康志向の消費者にも受け入れられたようだ。練り物需要が高い一方、かまぼこメーカーは他魚種での原料代用は難しそうだ。日本では従来、東南アジアで比較的水揚げが多く安価なイトヨリタイのすり身で代用してきた。ただ、貿易統計によると輸入単価はこの10年で38%高く、輸入量は3分の1以下に減った。

「東南アジア諸国の経済成長で自国消費が増え、中国の需要も高まり、すり身が日本に入ってくるようになってきた」(水産大手) かまぼこメーカーは現時点で商品価格への転嫁は検討していない。「客のニーズを考慮すると、数量を減らしたり値上げしたりするのは考えにくい」(練り製品大手)。原料高騰がメーカーを悩ませそうだ。